

朴斗星の盲人教育に関する研究：日本植民地期を中心に

金, 籠燮

九州大学大学院人間環境学研究院：助手：比較国際教育学

<https://doi.org/10.15017/985>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 3, pp.191-201, 2001-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース

バージョン：

権利関係：

朴斗星の盲人教育に関する研究

— 日本植民地期を中心に —

金 龍 燮

1. はじめに

韓国の盲人教育における朴斗星(1888~1963)の影響と功績は極めて大きいといえる。彼は、1913年1月6日朝鮮総督府済生院盲啞部の訓導としての発令をきっかけに、以後生涯にわたって盲人の教育及び生活向上のために尽力した。また、その生き方は盲人及びその関係者に大きな感銘を与えた。彼が蒔いた種は今日の韓国において盲人教育の礎となっている。

にもかかわらず、その活動は盲人及びその関係者以外にはあまり知られていないし、また彼に関する研究も乏しい。

そこで本稿では、彼が行った盲人への具体的教育事業と業績を明らかにしつつ、その意義を論じることを目的とする。

2. 朴斗星年譜

1888年4月26日(陰暦3月16日)	京畿道江華郡喬桐面上龍里516番地で生まれる。
1895年	普昌学校入学。
1899年	同校卒業。
1901年	権シンイル牧師からキリスト教の洗礼を受ける。
1903年	高氏と結婚。
1905年	漢城師範学校入学。
1906年	同校卒業。
1907年	於義洞普通学校訓導赴任。
1911年	李東輝から松庵という号を受ける。
1913年1月6日	朝鮮総督府済生院盲啞部訓導発令。
1917年	高氏死亡により、金景乃と再婚。
1921年3月	ハングル3.2式点字完成、朝鮮盲啞協会組織。
1922年4月	朝鮮総督府済生院盲啞部舎監就任。
1923年7月	朝鮮語点字研究委員会組織。

金 龍 燮

1926年11月4日	六花社を組織，朝鮮語点字である「訓盲正音」を頒布。
1927年7月8日	六花社を朝鮮盲人事業協会に改称。
1931年12月12日	朝鮮総督府済生院盲啞部長事務取扱発令。
1932年1月9日	同部長事務取扱辞任。
1935年3月31日	同部訓導辞職。
1935年	仁川永化学校校長赴任。
1935年5月21日	府面協議員選挙に訓盲正音の使用が公認される。
1940年	同校校長辞任。
1941年	新約聖書点字原板製作完成（朝鮮戦争の際，損失）。
1945年	点字回覧誌「チョップル」（츨츨，ろうそく）を発刊。
1957年	新約・旧約聖書点訳完成（24巻）。
1962年8月15日	文化褒章受賞。
1963年8月25日	死亡。
1965年11月4日	弟子たちにより，国立ソウル盲学校（朝鮮総督府済生院盲啞部後身）の校庭にハングル点字創案記念碑が建てられる。
1992年10月9日	文化勲章受賞。
1994年4月26日	松庵朴斗星記念館建立追進委員会（15名）発足。
1996年11月7日～同月8日	松庵朴斗星墓地追悼碑除幕及びセミナー（「盲人福祉その現住所はどこにあるのか」）開催。
1997年3月10日	仁川広域市視覚障碍人福祉館兼松庵朴斗星記念館建立準備委員会発足。
1999年9月13日	同福祉館兼同記念館開館。

出典：朴斗星「盲事日誌（1918～1954）」（原稿）（松庵朴斗星記念館所蔵）。

朴斗星「訓盲正音の由来」（原稿）1949年3月（朴貞嬉所蔵）。

朴秉宰『訓盲正音創案者朴斗星伝』社団法人韓国盲人教育研究会・韓国点字図書館。

「障碍人新聞」障碍人新聞社，1996年4月29日付，1996年11月18日付，1997年4月28日付。

「東亜日報」東亜日報社，1996年10月23日付，1999年9月9日付。

「ハンギョレ新聞」ハンギョレ新聞社，1994年5月2日付。

金千年「韓国盲人界実録」（フロッピーディスク，1997年6月記録完成），（国立ソウル盲学校所蔵）。

李相秦『松庵 朴斗星伝記』松庵記念事業会，2000年。

朝鮮総督府済生院盲啞部編『創立二十五年』1938年。

朴貞嬉への聞き取り調査（仁川市の自宅にて），に基づくもの。

3. 盲人教育とその活動

1) 盲人教育投身への経緯

朴斗星は、1913年1月6日に朝鮮総督府済生院盲啞部訓導に発令されるまでは、盲人教育に関わっていなかった。彼が盲人教育に投身することになったのは、ある意味では偶然であったといえる。漢城師範学校卒業後、京城にある於義洞普通学校で教鞭を執っていた彼が盲人教育に関わりを持つことになったきっかけは、「朝鮮総督府済生院盲啞部」⁽¹⁾を設立した朝鮮総督府が、「キリスト教信者で教員資格を持っている人を求める中、於義洞普通学校の訓導である松庵朴斗星が一番適格者であることを知った」⁽²⁾からである。これについて、彼自身も、「校長らの会議で推薦されたが、僕がキリスト教信者であることがその一つの理由であったと聞いた」⁽³⁾と述べている。

言い換えれば、当初は主として外的要因で盲人教育に携わることになったが、その後は使命感に燃えて彼自身はもちろんのこと、家族も大変な犠牲を甘受しながら、盲人のために全力を注ぎ、やがて韓国盲人界に大きな足跡を残した。

2) 盲人教育活動

1913年に設立された朝鮮総督府済生院盲啞部の草創期における状況及び朴斗星の教育活動について、彼と同郷であり、同部卒業生である「李相秦」⁽⁴⁾は、次のように記している。

…済生院（盲啞部盲本科：筆者）の創設当時には、速成科と本科があり、速成科は授業年限1年、本科は授業年限3年であったが、速成科は設けられてから2年で廃止された。

（中略）

…按摩、針術に必要な解剖学、生理学、按摩マッサージ、針術理論も盲人理論教師と一緒に教室に入り、日本人教師が何か一言喋ると、朴斗星はそれを朝鮮語で通訳するといった形の授業方法であったから、その授業がどのようなものであったかは想像がつく。そこで、その当時には松庵朴斗星を指して、生徒たちは通訳先生というあだ名をつけたという。ところが、後日知ることになったが、このように何年間日本人針按科教師の通訳教師の役割していた朴斗星は、てんから解剖学は自分が授業を担当したという。

（中略）

…その後、日本から点字印刷機が入ってきて、いわゆる彼らの国語の本（日本語の本）が点字で印刷され、（生徒たちが：筆者）日本語を少しずつ習うことになり、ある程度教育は成り立つことになったようである。

（中略）

…（当時は視覚：筆者）障害児をもつ父母でさえ彼らに対する教育の意義と必要性を感じないうえ、「日本人が（障害児は：筆者）無用のものであるから、教育させるという口実に連れて行って殺してしまうかもしれない」といった噂が流れ、盲人子女をもつ家庭では総督

府が生徒を募集しにいても応じないのが実状であった。

(中略)

そこで、朴斗星は盲啞部の学期中、授業時間には盲生徒を教え、休み時間には点字印刷機にくっついて点字本を出版し、(夏・冬：筆者) 休みになると、…津々浦々を訪ねて視覚障害児をもつ父母を説得し始めた。⁽⁵⁾

朴斗星の盲人教育はゼロからの出発であったが、このようにして強い信念と努力によって様々な障壁を取り除いていた。また、赴任した直後には朝鮮人訓導は彼一人であったので、通訳のためにあらゆる授業に参加しなければならず、盲啞部の創設以来の長い間同僚であり、同じキリスト教のメソジストであった「根本介蔵」⁽⁶⁾の助力を得て、日本点字を身につけながら授業に臨んでいた。

その後、日本点字だけで教育することの不十分さや、弟子たちの要望、民族主義に基づく自覚などによって、ハングル点字の研究に取り組んだ。そして1921年に、それまでの研究をまとめ、子音3点と母音2点からなっていたハングルの3・2式点字を考案した。しかし、誤読しやすいなどといった欠点があった。

さて、朝鮮の近代的「特殊教育」の嚆矢であり、当時すでに「平壤盲啞学校」を設立していたアメリカの医療宣教師の「ホール (Hall, R. S.)」⁽⁷⁾によって、ニューヨーク式点字に基づく4点のハングル点字が考案され、平壤を中心に使われていたが、4点しかなかったために多くの問題点を抱えており、済生院盲啞部では公式に使用されることはなかった。

朴斗星はホールに、4点のニューヨーク式点字を改め、世界的潮流であり、ハングルを的確に表現することのできる6点のブライユ式点字へ変更しようと言説したが断られた。二人の間にはハングル点字をめぐる意見の相異が浮き彫りになったが、これについて、朴斗星は次のように記している。

1899年頃から平壤でアメリカ人のホール夫人が女子盲人を集め、聖書を教え始めたが、韓国で盲人に文字をもたらしたのは、これが最初であった。しかし、ホール氏がニューヨーク出身のせいかな点字方式をニューヨーク式にしたことは、甚だ遺憾であった。

(中略)

僕は平壤盲学院又はホール夫人に対して、韓国語点字方式をブライユに改めようと提起し、利害得失を十分に説明しても、受け入れてくれなかった。のちには、ホール夫人が日本語もニューヨーク式にしたほうがよいとし、朝鮮式日本点字案までつくって送りながら、反対主張をしてきた。僕はこの問題が合意されるものものではないとし、我々の生徒たちと一般盲人を動員して研究することに決めた。⁽⁸⁾

したがって朴斗星は、朝鮮総督府済生院盲啞部出身者である盧學愚(盲本科第6回)、田泰煥(盲本科第8回)などを研究委員に委嘱し、1923年一緒に「朝鮮語点字研究委員会」を組織した。彼を

中心とする同委員会は、上記の3・2式点字の欠陥の補完をはじめとする多岐にわたる検討及び研究を行った。「訓盲正音配点に対する考案」⁽⁹⁾は、全13案が検討されたが、特記すべき点は、その案には日本人である「大塚米蔵」盲啞部長案（第1案）と「根本介蔵」訓導案（第5案）が含まれていたことである。「訓盲正音配点の選択」⁽¹⁰⁾における方法は、①覚えやすいこと、②誤読がないように読み方が正確であること、③配点の数を少なくすることである。

上記のような過程を経て、いよいよ1926年11月4日ブライユ式点字に基づく6点のハングル点字である「訓盲正音」⁽¹¹⁾が頒布されることになった。

3) 点字通信教育

1926年8月12日に完成した点字を試すため、「朝鮮語点字研究会」を組織し、「訓民正音」の頒布と共に同研究会の名称を「六花社」と改めた。六花社と名付けられたのは、創案した点字が6点からなっているので、まるで空から降ってくる六角形の雪と似ているからである。すなわち、点字の6点と雪のむつの花びらとを重ね合わせたのである。また韓国語では、目と雪の発音が同音異義語である「눈(ヌン)」なので、雪が盲人の目を明るくするという意味合いが込められている。

一方、朴斗星を中心とする六花社は、その通信文を媒介に盲人に関わる様々な情報を発信していた。そのうち、「六花社規約」⁽¹²⁾には、同社の目的を「盲人ノ為ニ点字ヲ研究普及サセ以テ智識ヲ啓発シ社会的ニ向上」(第2条)とせしめ、その実行方法として同条に、「一、点字ヲ使用シ毎月定期通信ヲ行フ」、「二、点字ニ関スル事業ヲ営ム」、「三、其他必要トスル付帯事業ヲ営ム」ことを定めている。

そこで朴斗星は、点字通信教育を積極的に展開することになるが、当時彼から点字通信教育を受けていた一人であり、のちに朝鮮総督府済生院盲啞部(盲本科第23回)や東京盲学校などに入学した「金千年」⁽¹³⁾は、その経験を下記のとおり、回顧している。

先生はまず諸機関に頼んで葉書などといった紙を蒐集し、練習用点字紙を地方の盲人に送ってくれた。誰か通信教育を希望とすれば、…点字板と点字を学ぶのに必要である詳細な説明書と官庁で使い捨てた厚い紙などを送付した。

ある程度点字を学び、読める段階になると、一番最初に送ってくれた本は「千字文」であり、次の段階では「朝鮮語読本」1巻から6巻までの順であり、引き続き「演説集」などを送ってくれた。僕が育った町は平安北道義州邑で、そこには8名の盲人が住んでいたが、そのうち、点字を学んでみようとする勇氣を出すほどの意欲に満ちた人は、僕を含めて4名で…全部占卜業に従事していたので、日常生活が高踏的であったため、済生院出身の按摩する盲人に接すると、(新式盲人)としてまるで天使のように羨ましがっていた。

…朴先生から通信教育の全資料送ってもらった日は、陰暦で1933年3月15日であり、僕の年齢は2ヶ月の足りない満14歳の時であった。

点字板を初めて接すると、とても目新しかった。点字を教えるための説明書は、すべてハ

ングルであり、詳細で親切であったから皆感嘆したが、その長い解説のなかに、「他の国には盲人の法律家も多いです…」という幾つかの文章は、今日でも脳裏のなかにはっきり残っている。

(中略)

点字を身につけてからは、我々は朴先生と毎日のように手紙をやりとりした。手紙を出してから返事がくるまでは三日ほどであったが、…どんなに些細なことやつまらない質問をしても先生は必ず返事してくれた。

(中略)

通信手段が発達した今日でさえ通信教育は大変なことなのに、その当時それも点字を通じて通信教育を行ったことは、朴先生先駆者的な功績と言わざるを得ない。我が国の盲人教育史における特記すべき点は何かと誰か僕に聞くと、1890年代末にすでに平壤で盲女性のための統合教育が実施されたことと1930年代初期に点字で通信教育が成功に行われたことを迷わずに挙げる。⁽¹⁴⁾

このように、朴斗星の盲人教育は、朝鮮総督府済生院盲啞部にとどまらず、全国の盲人に行き渡っており、新しい知識と生活向上をもたらした。また、私財をを投じながら行った点字通信教育は、当然大変な点訳が伴うので、彼自身はもちろんのこと、その家族までも大きな犠牲の上で成り立つものであった。

4. 盲人教育観とその思想

朴斗星は、貧しい農民の家庭で生まれたにもかかわらず向学心が強かった。彼の生き方は、まるで号である「松庵」そのものであったといえる。松庵という号をもつようになった経緯は、下記のとおりである。

李東輝は、国権回復の将来は文盲を退治することにあると強調し、有望な若者の進学を支援したが、彼の取り持ちで朴斗星は漢城師範学校に入学した。卒業後、於義洞普通学校の訓導として就任、そこで韓日併合を迎えた。1911年李東輝が寺内総督暗殺未遂事件に関わり、1年間監獄生活を送ってから北満州に亡命することになり、朴斗星に同行を勧誘した。

しかし、朴斗星は残って「実力培養・後進養成」をしたいという理由をあげて断った。別れる際、李東輝が作ってくれた雅号が松庵である。庵の松のように節義と気概を曲げるなどという意味が込められていた。⁽¹⁵⁾

そしてキリスト教の家庭で育ち、満13歳になる1901年に洗礼を受けたメソジストであったが、盲人のためなら、「聖書」以外の仏教や占トに関わるものである「千手経」、「八陽経」、「天気大要」

なども点訳した。その当時の点訳事業は大変な重労働であったから、関節炎はもちろん彼自身も失明の危機にさらされた。その功績を讃え、1965年8月25日には「朴斗星先生ハングル点字創案記念碑」が除幕された。

要するに、盲人に希望と自立生活を与えようと最善を尽くした彼の盲人教育の根幹には、宗教に基づく博愛精神、朝鮮人としての民族精神、教育者としての強い信念があったといえる。

5. おわりに

上述してきたとおり、朝鮮総督府済生院盲啞部に赴任するまでは盲人教育と無縁であった朴斗星は、自らの努力と工夫や周りの助力によって、日本の植民地統治下という厳しい時代状況にもかかわらず朝鮮の盲人界に多大な貢献をした。

彼の盲人教育における最も大きな意義は、第1に、「訓盲正音」の創案とその普及を通し、主として口伝教育に頼っていた盲人に体系的な文字教育をもたらしたことにある。第2に、盲人に対する社会の認識を改善したことにある。すなわち、無用のものとしてみなされてきた盲人も教育の機会さえ与えれば、その能力を発揮できることを証明してみせたことにある。第3に、盲人の教育方法を考案、確立したことにある。

したがって彼の活動によって、今日のような韓国の盲人教育が築きあげられたと言っても過言ではない。そして彼が多くのことを成し遂げられたのは、本人の献身的努力によるものであったことは言うまでもないが、裏でそれを支えた家族や関係者があったことも忘れてはならない。

注

- (1) 詳細は、拙稿「朝鮮総督府済生院に関する一考察 — 盲啞部を中心に — 」『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号（通巻第44集）1999年を参照。
- (2) 朴秉宰『訓盲正音創案者 朴斗星伝』社団法人韓国盲人教育研究会・韓国点字図書館、5頁。
- (3) 朴斗星「訓盲正音の由来」（原稿）1949年3月（朴貞嬉所蔵）。
- (4) 李相秦年譜

1926年11月3日	京畿道仁川市中区で生まれる。
1942年3月	朝鮮総督府済生院盲啞部卒業（盲本科第27回）。
1942年4月～1947年11月	理療業に従事。
1947年11月～1948年8月	米軍政京畿道支部軍政裁判通訳。
1948年9月～1952年4月	英語塾講師。
1950年12月～1952年2月	米国第2兵站基地司令部法務監室軍法会議通訳。
1953年4月～同年10月	仁川中学校英語講師。
1953年11月～1955年3月	仁川港湾司令部（米軍）法務監室勤務。

金 龍 雙

1955年4月～1992年2月	ソウル盲学校教師。
1965年11月	特殊学校（盲学校）英語教師選考考試に合格し、教師資格証を取得。
1965年3月～1966年10月	東亜出版社発行英韓小辞典点訳出版に当たって、編纂校正を担当。
1985年10月	盲学校理療科教科書（国定）執筆。
1990年9月	特殊学校（盲学校）中高等部英語教科書（国定）執筆。
1992年11月	統一国民党が主催した障害者体験手記公募に、「我が夢が実現されるまで」と題して応募、最優秀賞受賞。
1994年6月	韓国障害者雇用促進公団が公募した障害者体験手記で、「視覚障害者英語学徒が歩んできた道」と題して応募、優秀賞受賞。

出典：李相秦『松庵 朴斗星伝記』松庵記念事業会，2000年に基づくもの。

(5) 李相秦『松庵 朴斗星伝記』松庵記念事業会，2000年，22-24頁。

(6) 根本介蔵（旧助蔵）年譜

1879年7月17日	福島県安達郡本宮町字西町3番地で、父根本新介と母キノの長男として生まれるが、9歳の時麻疹により失明。
1896年4月	東京盲啞学校尋常科に入学。
1899年3月31日	同校尋常科卒業。
1901年4月16日	同校鍼按科卒業（卒業盲生総代として謝辞を述べる）。
4月	私立横浜訓盲院。
1906年4月	私立岡山盲啞院。
1907年12月	福島県私立盤城訓盲院（現県立平盲学校）。
1908年3月10日	同院教頭。
1913年1月31日	同院依願退職。
1913年2月	朝鮮総督府済生院盲啞部訓導。
1928年11月10日	帝国盲教育会より感謝状。
1932年1月15日	勲八等瑞宝章。
1934年7月29日	帝国盲教育会より表彰状。
1935年10月1日	朝鮮総督府より表彰状。
1939年2月11日	朝鮮総督より教育功績賞。
1939年2月14日	勲七等瑞宝章。
1940年2月11日	盤城訓盲院同窓会より感謝状。
1940年7月26日	帝国盲教育会より表彰状。
1940年10月30日	朝鮮教育会より表彰状。

- 1940年11月10日 中央盲人福祉協会より表彰状。
1941年4月30日 同部依願退職。
1950年12月12日 福島県郡山市清水台2-4-6にて死亡。

出典：「官報」第5337号，1901年（明治34）4月22日付。

福島県立盲学校編『福島県立盲学校創立福島県盲人教育創始百周年記念誌 百年のあゆみ — 1898（明治31）年～1998（平成10）年 —』福島県立盲学校，1998年。
筑波大学附属盲学校所蔵の根本介蔵関係史料，に基づくもの。

(7) Rosetta Sherwood Hall（許乙，1865～1951）年譜

- 1865年9月19日 ニューヨーク州に生まれる。
1889年 ペンシルヴェニア女子医科大学卒業。
1889年8月 ニューヨークの貧民街で医療ボランティアの活動中に William James Hall（1860～1894）と出会い婚約。
1890年10月13日 米国監理会医療宣教師として来朝，京城の保救女館で女性のための医療活動に従事する。
1891年12月 婚約者 W. J. Hall 来朝。
1892年6月27日 結婚。
1894年5月 平壤で呉鳳来という盲少女に最初に点字指導を行う。
1897年 平壤でホール（W. J. Hall）記念病院を開院。
ニューヨーク式ハングル点字を考案。
1898年5月 呉鳳来にニューヨーク式ハングル点字の体系的指導を行う。
1900年 平壤正進学校内に盲女兒のための特殊学級を設ける。
1908年 聾教育の準備のため，李イッミンらを中国に派遣。
1909年 聾教育をはじめめる。
1910年 平壤盲啞学校となる。
1914年 平壤盲啞学校卒業生である呉鳳来，曹培女を東京盲学校に留学させる。
1914年8月 平壤盲啞学校で第1回東洋盲啞教育会議を開催する。
1917年 京城の東大門婦人病院で活動。
1920年 女子医学班組織，朝鮮人女子医師を養成。
1928年9月4日 京城女子医学専門学校設立（高麗大学校医科大学の前身）。
1933年 救世療養院内にロゼッタ記念礼拝堂建立。
1935年 健康のため宣教師を辞任，帰国。
1951年4月5日 死亡。

出典：Hall, R. S. (Ed.) (1902). *The Life of Rev. William James Hall, M. D.*, New York: Press of Eaton Mains.

金東悦訳『ドクターホールの朝鮮回想』東亜日報社，1984年。Hall, Sherwood (1978),
With Stethoscope in Asia: Korea, MCL Associates, McLean Virginia.

韓国基督教歴史研究所編『資料叢書第18輯 来韓宣教師総覧』韓国基督教歴史研究所，
1996年（修正増補版），に基づくもの。

- (8) 朴斗星「訓盲正音の由来」（原稿）1949年3月（朴貞嬉所蔵）。
- (9) 朴斗星「盲事日誌（1918～1954）」（原稿）（松庵朴斗星記念館所蔵）。
- (10) 同上。
- (11) 「訓盲正音」という名称は，ハングルが創られた際，いわゆる「訓民正音」としたので，それに因んで名付けられた。
- (12) 朴斗星「盲事日誌（1918～1954）」（原稿）（松庵朴斗星記念館所蔵）。
- (13) 詳細は，拙稿「戦前における朝鮮の盲人教育 — 金千年の『韓国盲人界実録』を中心に —」『アジア教育史研究 第8号』1999年を参照。
- (14) 金千年「韓国盲人界実録」文字発達編〈国内〉より要約（フロッピーディスク，1997年6月記録完成，国立ソウル盲学校所蔵）。
- (15) 「障碍人新聞」障碍人新聞社，1996年4月29日付。

付 記

本研究の際にいろいろとお世話になった松庵の次女である朴貞嬉女史及び弟子である金千年先生・李相秦先生，仁川広域市視覚障害者福祉館の権ヒョンイム主任に深く感謝の意を表したい。

**A Study on the Doo-Sung PARK's Education of the People with Blindness
— Focusing on the Japanese Colonial Period —**

Yong-Sub KIM

This study clarifies the concrete educational activities and achievement of the people with blindness.

In spite of the severe era situation called colony region under the Japan, Doo-Sung PARK did great contribution for the people with blindness by surrounding help, in Korea.

The significance in education of the people with blindness were suggested as below:

a) The about systematic education for the persons with blindness who were mainly relying on oral instructional education through the Korean Braille called *Kunmoseion*; b) Awareness and recognition of the persons with blindness in the society; c) Establishment of the educational methods for the persons with blindness.

Therefore, it is not too much to say that his activities built up the base for the education of persons with blindness in the today's Korea.